

インタビュー

# 社会は大学を どう見ているか

変わろうとする大学教育を社会はどのように評価しているのか。そして、大学に対して何を期待しているのか。大学の今を熟知する4人に聞いた。

## 大学は社会の公器としての 自覚を持ち 変革のための自己決定を

読売新聞東京本社  
教育ルネサンス取材班

**松本美奈**  
Matsumoto Mina

まつもと・みな ©2008年から毎年7月に読売新聞紙上で掲載されている「大学の實力」調査と、特集記事などを担当。就職者数や進学者数、退学率、卒業率、更に在学生への学習・生活支援など多岐にわたる項目で大学の教育力、人材育成力を分析する。

## 教育改革の必要性に社会は気づき始めている

### 進む大学の二極化 大学を見る目にも変化が

私が全国の大学の取材を始めて4年が経ちます。この短い間にも、日本の大学は大きく変わったと感じています。しかし、それは全ての大学ではありません。変わった大学、変わろうとしている大学と、そうでない大学の二極化はますます進んでいます。

変わろうとしているのは、社会の現状、そして自校の学生にしっかりと目を向けている大学です。一方、変わらない大学は外の世界に目を向けず、知名度の上にあぐらをかいている大学です。それを許してきた責任は、学生本人や保護者、高校現場にもあるでしょう。偏差値にしか目

を向けず、各大学でどんな教育が行われているかに関心を向けなかったからです。しかし、長引く不況や国際競争の激化など社会状況が変化し、更に全入時代を迎えて大学入試がこれまで通りの意味を持たなくなるなかで、大学を見る目も厳しくなっています。現に、『大学の實力』を読んだ保護者や学生から「あの大学の自己評価はウソだ」といった声が寄せられることもあります。

高校の校長を務めた後、今は大学でキャリア教育を担当している大学職員は、あるとき私にこう言いました。「大学に入りさえすれば何とかなると入学を後押しした教え子たちが、大学に4年間通っても何も成長しないまま卒業していることを知ってしまった。自分のしてきた罪の大きさに気が付いた」と。

### 人という大切なバトン しっかりと引き継いでほしい

高校生の二人に一人が大学に進む時代です。目的意識もないまま進学する高校生もたくさんいるでしょう。そうした学生を、大学も漫然と受け入れ、卒業させる。そして就職も出来ず、家に閉じこもってしまう若者を育ててしまう。前述の大学職員は、「各大学の退学率のデータを見ると、このなかに自分が入学を勧めた学生がいるのでは……」とつぶやきます。だから今彼は、これといった目的意識もなく進学してきた学生でも伸ばすことが出来るような教育、学生本人も気が付かなかった可能性を引き出す教育を行えるよう、教育改革に尽力しています。大学の

現実にもっと多くの保護者、高校教員、そして大学教員・職員が気付いたら、大学は今まで以上にダイナミックに変わらざるを得ないはずです。

しかし、現実気付いてなお、「勉強しない学生が悪い」「大学の役割はそんなことではない」と現実を受け入れず、これまでの大学像に固執する大学人もいます。資源と呼べるものは人しかない日本にあって、本当にそうした考えでよいのかと私は問

いたいのです。学生がひ弱になると嘆くばかりでなく、いずれは立ちできるように育て方を変えなければならないのではないかと。小・中学校の教育が悪い、高校が駄目だと責任を押しつけ合うのではなく、例えば少人数クラスや双方向型の授業の採用などによって、今まで以上に丁寧に、人という大切なバトンを落とさないように引き継いでいくことが必要だと思うのです。



## 人材育成の「孵卵器」たる大学をみんなで育てる

### 大学のトップは自校の現状を本当に知っているのか？

大学教育改革は個々の教員の努力だけでは困難であり、組織としての取り組みが不可欠です。そのためには、大学のトップが大学の現状をしっかりと認識しなければならないでしょう。しかし、『大学の实力』調査で集められた大学のトップの言葉のなかには、「この人は、キャンパスを歩き、学生の姿を見たことがあるのだろうか」と疑うものもあります。トップの現状把握能力も二極化しているのかもしれない。

それでも、大学は大きく変わる可能性を持っていると私は思っています。教育機関のなかで、最も大きな裁量、自己決定権を持ち、「自由の府」と呼ばれるのが大学です。自由であることは、大胆な改革のエネルギーになるはず。大学のなかで、学生を育てる授業をしている教員をきちんと評価する仕組みをつくるのが出来れば、改革は個人レベルの活動にとどまらず、組織のなかで大きく広がっていくでしょう。

### 大学は社会全体の財産である

読売新聞で『大学の实力』調査がスタートしてから今まで、私のなかで変わらないのは「このままではよくないことに気が付いてもらいたい」という、大学に自己変革を期待する思いです。だからこそ、さまざまな観点から、しかも自己申告による調査を行っているのです。

大学の自己申告をどのように読み解くかについても、私たちは読者にしっかりと伝えていくつもりです。例えば、大学教育改革の一つとして注目されるPBL\*や討論中心の授業形態に関して、大規模大学が「全学的に行っている」と答えていたら、実際にどんな工夫をして実現しているのか、ぜひ大学に聞いてみなければな

りません。大学改革をステークホルダーとして見守るための視座や必要な知識も提供していきたいと思っています。

自校の学生を有為な人材に育て上げ、社会に送り出すことは大学の最大のミッションです。それが出来ない大学は、退場を迫られる時代はそう遠くないと私は思います。

大学生を次世代を担う人材の「卵」に例えるなら、大学は大切な「孵卵器」です。大学は社会の宝物、公共の財産でもあるのですから、簡単に壊れてもらっては困るのです。社会みんなで大学を育てようとしている気運に、大学人はぜひ気が付いてほしいと思います。そしてそれぞれの大学が、いろいろな能力、可能性を持った「卵たち」にふさわしい「孵卵器」となることを願っています。

### 『大学の实力2012』

読売新聞教育取材班 著（発行：中央公論新社）

◎623大学の就職者数、進学者数、退学率、卒業率といった各種データと大学の自己評価で「实力」を読み解く。ランキングによる画一的な序列化ではなく、一人ひとりにとってよりよい大学とは何か考える視点を提供する。学生の「孤立化」を防ぐ取り組みなど、近年注目されているテーマも取り上げている。



\* PBL : Project Based Learning 課題解決型授業

# 学生の期待に 応えるために 大学は教育改革を進めよ

大学研究家

**山内太地**

Yamauchi Taiji

やまうち・たいじ◎東洋大社会学部卒業。理想の大学教育を求め、47都道府県と11か国・3地域の865大学1152キャンパスを訪問。国内4年制大学784校（2011年度現在）は全て訪問。著書に『真実の大学案内』（東京図書出版会）、『こんな大学で学びたい！ 日本全国773校探訪記』（新潮社）など。

## 大学の教育改革が進まないのは誰のせい？

### 社会のイメージと 大学の中身は大きく異なる

退屈でつまらない授業、丸写しが横行するレポート、そしてたとえ居眠りしても出席さえすれば取得できる単位。大学生になったばかりの頃、「大学なんてそういうものだろう」と私も納得していました。しかし、次第に「本当にこれでよいのだろうか」と思うようになり、いろいろな大学を訪ね歩くようになりました。15年ほど前のことです。以来、全国47都道府県全ての大学を訪問し、キャンパスを歩き、学生や教職員と語り合い、ときには授業を聴講したりしながら、日本の大学を見てきました。

実際に大学に行ってみて分かったことは、世間一般のイメージと実態のギャップの大きさです。例えば、社会状況の変化に伴い、大学に対し

て官民いずれからも教育改革が強く求められているのは周知の事実ですが、その進み具合は大学によって著しく異なります。しかも誰でも知っているような有名大学ほど、旧態依然としたマスプロ教育がほとんど改善されていないと感じます。

### 社会の要請を 大学は無視しているのか？

これからの社会はグローバル人材を必要としており、課題発見・解決力やコミュニケーション能力を大学は育成しなければならないと皆が言っているのに、大学だけがそれを無視しているように見えるのです。偏差値と知名度を重視する高校生と保護者にしか、大学は目を向けていないからでしょうか。これでは国際的な競争に打ち勝つ人材は育成でき

ないでしょうし、競争に生き残った企業も、日本の大学出身の人材を採用しなくなってしまうでしょう。

ひと言で言えば、大学の状況は二極化していると思います。教授会などが社会のニーズや若手教員の提言を受け止め、教育改革に向けて努力している大学とそうでない大学に二分されています。しかも困ったことに、教育改革の進捗度と学生の人気はなかなか一致しない。受験生や保護者だけでなく高校教員にも大学を中身で選ぶ視点が育っていません。教育産業が大学の中身をしっかり伝えてこなかったこともその要因の一つです。

しかし、そんななかでも、質の高い教育を受けた人材が少しずつ社会に出ている。彼らが活躍を始めれば、人々の大学を見る視点も豊かになり、状況はもう少し変わるかもしれません。

## 大学の教育力を評価するための二つのポイント

### 1年次の少人数指導が 4年間の学びを変える

本来、私たちが大学の教育力を評

価する際に見るべきポイントと、大学が自校の教育力をアピールするために伝えるべきポイントは同じはず。私はその一つに、教員一人当たりの学生数を挙げています。

そもそも世界の名門大学と比べて、日本の大学は教員一人当たりの学生数が多すぎます。これまではマスプロ教育でもよかったのですが、しかし、今はそれだけでは社会で通



用する人材を育てることが出来ません。「3、4年生になってゼミに所属してから少人数で鍛えればよい」という声もありますが、それは間違いです。推薦・AO入試に安易に流れる受験生が多いことから分かるように、最近の学生は高い目標に向かって粘り強く学習する経験が少ない。1、2年生の間にマスプロ教育の下、楽をして過ごせば、3年生になっても勉強しようとは思わないでしょう。そもそも大規模大学には、全員がゼミに入れないところも多いのです。

そこで重要になるのが、1年次の導入ゼミだと思います。それも補習教育のようなものではなく、少人数のグループ単位でハイレベルの学問、

文理融合型の学問に触れさせ、考える力を養う授業です。1年生のときに少人数で丁寧な指導を行い、しっかり鍛えれば大学生としてのものの考え方、学習習慣が身に付き、4年間の過ごし方が変わり、結果的に就職実績も向上するはず。エントリーシートの書き方などではない、社会に出て役立つキャリアの基盤を大学らしいきめ細かな学びを通して築くことが重要だと思います。

### 学びのなかで友人ができるシステム

大学の教育力を見るもう一つのポイントは、アクティブラーニング\*やPBLなどの課題解決型の授業の有無です。どれくらいの講座があるのか、どれくらいの割合の学生が受講できるのかをチェックすることを高校生や保護者に勧めています。

アクティブラーニングやPBLなどの課題解決型の授業を私が重視するのは、思考力やコミュニケーション能力を育成できるからだけではありません。何より、協同的な学びのなかで質の高い友人関係が出来るか

らです。アルバイトや遊びではない、学問の友人です。

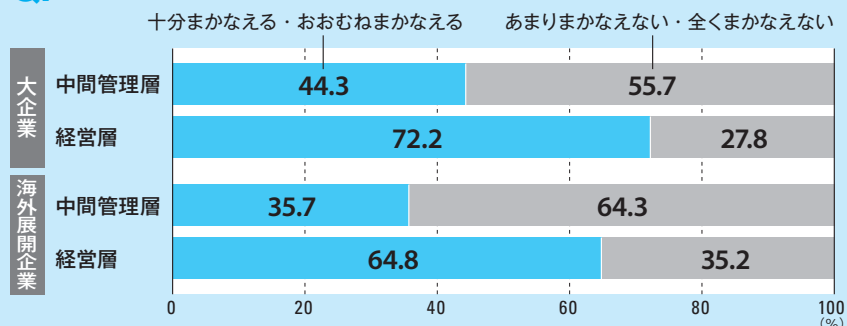
「友だちづくりなんて、それこそ個人の問題だ」と言われそうですが、大学生の人間関係の構築力の弱さを、大学関係者は実感しているはず。もはや個人の問題ではなく、大学が学びのシステムを変えながら、対応すべき問題です。それに気が付いている大学は、TA（ティーチング・アシスタント）制を導入したり、学生が空き時間に自由に立ち寄って勉強したり、外国人講師や専属スタッフと英語でおしゃべりしたりすることができるスペースをつくっています。そういう小さな配慮も、学生の4年間を大きく変えるでしょう。

「大学に進学したけれど、期待していたような高い教育を受けられなかった」という、大学と大学生の間のギャップをなくしたい、と私は強く思います。そのために、教育改革をしっかりと行っている大学の現状と成果を、まだ動き出していない大学関係者に伝えて改革への動機付けとしたいですし、高校生や保護者に伝えて大学を見る目を養ってもらいたい。それは日本の大学の再生にきつとつながると信じています。

## 「高度な人材は日本人だけではまかなえない」と企業は考えている

◎日本企業約400社が回答したアンケートでは、「大企業の中間管理職」が「日本人だけではまかなえない」と考えている企業は半数を超える。「海外展開企業の中間管理職」に至っては、64%の企業が「日本人だけではまかなえない」と考えている。経営を左右する高度な日本人材の欠乏感は大きな問題となってきている。

### Q. 求める人材が日本人だけでまかなえるか



※2007年1月、上場企業（東証1部、2部、地方上場、ジャスダック）約3550社、その他企業の製造業について従業員数上位から約450社を無作為に抽出し、合計4000社に対して行われたもの（有効回答数406社）。大企業は、従業員規模1000人以上の企業、海外展開企業は海外売上比率30%以上の企業  
※経済産業省「グローバル人材マネジメント研究会」資料

\*アクティブラーニング 課題研究やPBL、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生が能動的な学習を行う授業

# 高校生が求める学びを理解し、大学の現状や学問・研究を生き生きと伝えてほしい

大学選択の現場

東京都立新宿高校  
進路指導部

◎大正10(1921)年創立。生徒数は1学年約320人。2007年に東京都教育委員会により「進学指導特別推進校」に指定。11年度入試では、国公立大は東京工大、一橋大、東京医歯大、東京外国語大、千葉大などに74人が合格。私立大・短大は青山学院大、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに869人が合格(現浪計)。

## 「大学での成長」を高校生は強く求めている

進路指導部主任 **木村知博** Kimura Tomohiro

### 視野を広げさせ、進路観を深める高校の指導

高校入学時の段階では、多くの生徒は明確な志望大を決めていません。決まっている生徒もいますが、よく話を聞くと、名前を知っている大学を挙げている程度です。学部についても、「英語が得意だから国際関係学系統の学部」といった具合です。それくらい生徒の進路に対する視野は狭いため、私たちの指導は、生徒の進路観を広め、深めることが目的となります。

具体的には、1年生から「総合的な学習の時間」などを利用して、学びたいこと、就きたい仕事を考え、そしてオープンキャンパスなどに参加して大学を具体的にイメージしていくことになります。

指導の大原則としているのは、「行きたい大学に行こう」ということ。だから、難易度や偏差値は1年生の間は生徒にあまり考えさせない。行きたい大学・学部を見つけて、それが高いレベルであってもまずは目指して努力しようと声をかけます。学力的なギャップがあったとしても、それをどう埋めていくかを一緒に考

え、その力が付くように指導します。そして「この大学に行きたい」と志望が固まってきた生徒には、「なぜこの大学なのか」「他は調べたのか」と尋ね、もっと行きたいと思える大学を探させるのです。だから、行きたい大学は変わり、深まるのです。

### 学生の成長にこだわりたい

生徒が複数の大学を前にして迷ってしまい、相談にくることもあります。そんなとき、生徒には大学を比較する観点を示します。就職実績や研究施設の充実度、大学生の意識調査などから分かる大学の面倒見のよさ、満足度などいろいろな角度から大学を比較することで、自分に適した大学がどこなのかを少しずつ理解させていくのです。情報誌やオープンキャンパス、ウェブサイトなどから情報を得ていきますが、最も大きな影響を与えるのは卒業生の声です。学校で開催される先輩講話などを通して、自分たちがそれまで調べた情報、数値の意味を理解し、大学をより身近に感じるようです。生徒が志望大について調べることは、自分

の生き方をデザインする作業といえると思います。ですから、その大学でどのような学びが出来るのか、どう成長するのかをイメージできるような情報があると、その大学の存在は生徒に大きく近づくのではないのでしょうか。その意味で、1年次に行われる導入ゼミなどで、大学らしいアカデミックな学びのプログラムを実践している大学の話には生徒も関心を持って耳を傾けています。

近年は教育改革に取り組む大学も増え、学部長などが直接高校を訪ねて、大学が変わりつつあることを私たちに向けて発信するようになりま



した。そのときに、熱意を持って指導してくれる、生徒を成長させてくれると感じる大学には感銘を受けることも多くあります。

確かに就職率や講座の数など数字も大切です。しかし私たちが数字と並んで関心を持っているのは「4年間の学びでどのような成長を果たした

のか」です。それが見えてくるような情報発信を大学には望んでいます。

## 卒業生が語る「学びの面白さ」が生徒を引きつける

進路指導部副主任 **上田隆之** Ueda Takayuki

### 卒業生の生の声に 耳を傾ける

生徒の進路意識を高める情報として、進路指導を担当する私たちが重視しているのが、卒業生をはじめとする、大学に通う学生の生の声です。本校でも、主に1、2年生を対象に、大学生を招いた進路講演会を開催し、受験勉強の体験談、学部・学科の特徴、大学生活の様子などを話してもらったり、進路指導用の小冊子の原稿を提出してもらったりする機会が増えています。

私自身、彼らの話を聞き比べると、入試の段階ではたとえ同じような難易度であっても、授業の様子、実験実習の環境、就職活動の支援体制などは大学によってずいぶん違うことがよく分かります。

久しぶりに母校を訪ねてくれた卒業生と話していると、残念なことなのですが、「大学の授業はつまらない」と話す学生が実はとても多いのです。私たちも、研究機関としての大学の意義、高校と大学の学習の進め方の違い、1年生から4年生へと深まっていく大学での学びの見通しなどを話すようにしていますが、やはり従来のマスプロ型の授業に対して不満を感じ、期待していた大学生活に失望感を抱く学生は少なくありません。

しかし、そんななかでも、「1年生

のうちからゼミ活動などに参加して充実した学習に取り組んでいる」と、それこそ目を輝かせて話す卒業生もいます。そうした話を聞くと、今の若者が大学に求めている学びがどのようなスタイルのものなのかを改めて実感しますし、そういう大学は、高校教員として生徒に勧めたい大学として印象に残ります。

### 真に生徒に合った 大学を探して

大学生の就職状況が厳しく、また企業も国際競争にさらされている現代社会で、生徒も「社会で求められている力は何か」を考えています。そして、大学で一方通行型の講義をただ漫然と聴いているだけでは、今の社会で通用する力が身に付かないと、既に高校生も漠然と気が付いているかもしれません。

高校生自身にも課題があるでしょう。今の高校生は子どもの頃から与えられることに慣れ、自分の考え、基準で選ぶ力が十分身に付いていないと感じます。だからこそ、学習の仕方、興味の見つけ方から教えてくれる面倒見のよい大学の方が安心して進学できると思うのでしょうか。

私たちも生徒と志望大について面談をする際、「この生徒の性格で、この大学に4年間通い続けることが出来



るだろうか」「この生徒の性格ならば、学習の進め方などを丁寧に面倒を見てくれる大学の方がよいのでは」と考えることはよくあります。有名大に合格すればそれでよい、などという感覚の進路指導では十分とは言えません。生徒の成長に資する教育の実践や環境が用意されている大学なのかを、生徒一人ひとりの学力や性格、目線を大切にしながら丁寧に検討し、指導しています。

だからこそ、卒業生が母校を訪れて「こんな授業を受けてワクワクした」と生き生きと語ってくれることが、生徒と教師にとっては何よりも刺激になります。卒業生が「大学の学びは面白い」と進学を勧めたくなるような大学が増えることを期待します。